

秋成の狂蕩と列子との関係

堺 光 一

(一)

近世文学者の中の一秀峰上田秋成「享保十九年（一七三四）生れ——文化六年（一八〇九）歿す」は数奇な運命と、なおその上に狷介孤独という不遇な生涯を送つた奇人的な作者であつた。

その文芸創作の態度においても初期は浮世草子作者（八文字屋本氣質もの）であり、中期は読本作者（怪異小説）であり晩年は辛辣な隨筆をかいた。

その変貌は、生涯の生活にもあらわれて、文芸家であり、国学者であり、さては医者であり茶人であり、その活動の分野は多岐にわたつていたのである。

しかも産を破り資を失つては放浪し妻を亡くし眼をいためて秋成自ら「嗟呼天何として、我を生みしや」と慨歎し、また知人からは「白眼にして世と交らず。惜むべし」と、社会から離反してゆく秋成の孤絶を惜まれたのである。

しかし秋成が「不遇薄命」とか「狷介峭直」とか思われながらも、決して時代の敗者でも運命に破れたというでもなかつたということは注目に値する。常に不遇と戦い、時代におもねず、しかも自己

をいつわらず、不屈な精神をもつて、生涯を生き抜いた人であつたということとは看過できない。

では秋成の不遇な生涯、特異な変貌を示す一生は何によつてもち來たらされたのであろうか。また不遇といえ、浮浪子といえ、芸術においても、自己自身のことにおいても、生涯を通しての不屈なたたかいは如何なる精神態度によるのであろうか。この小論においてこの事を考察してみる。ところで、それを知るためにはまず、

今は文も歌も玩（もてあそ）ぶまじく成りぬ。されど其の後も五とせ程のあだ言（無駄こと）ども、又つづらにころ／＼とばかり言ひ出でたり、いとはつかしとて、七十五歳の今やうやう思ひやみぬべしとて筆すてつ（自伝）。

と長い生涯の果に文筆生活を断念して、偽わりのない、秋成の履歴や所懐を書き残した秋成の自叙伝『自伝』を見ることは極めて有力な資料を与えてくれる。この『自伝』の中に次のような一節があることは注目に値する。すなわち、

父もおいつきてなく成り給へば、我若きものからわたらいの心（渡世の心）おぞくして（鈍くして）、家は火に亡び宝は人に奪はれ、三十人という歳より泊然としてありか定めず住みわつ

らやふ程に、母もなく成り給ひては、おのがまゝにしありかんとて、都には来たりき。故郷を去り六親を離れ産業なきものは狂蕩の子と云ふ、智略にて家をおこすも道にあらずと、聖人は教へ給へりきとぞ、智略なき世に心いらん（熬らん）心を勞すること）よりは、狂蕩と呼ばれておの（己）がまゝならんとて、かく老い朽つるまでありけり。「自伝」

ここでは秋成中年の父母との死別、火災蕩尽後の漂泊生活の後大阪を離別して京都に移り秋成の生涯の終りを「狂蕩と呼ばれておのがまゝ」の生活に浸たろうとする秋成の真実を吐露している。

ここに言う「狂蕩」について同じことが、尚詳しく秋成が六十七歳の頃に万葉集の注釈を書いた『檜の杣』の中で発見することができ。万葉集の注釈を試みるにおいても秋成個人の心境や所懐を引き合ひにして述べてあるのが所々に見えるが、特に卷五山上憶良の令反感情歌を評した文の続きに秋成自身の放蕩を回顧し、同時に流寓の間、孤独貧窮の現在を歎いて次の様に述べている。

無為自然など云教へに淫みて情欲の私もて人倫を忘却するから国法を犯すに到る者也、己は口才に克云逃るゝと思ふを、憶良（山上）一人有さずして教示忠誠也。かゝるをこそ朝にも忠誠に親族にも孝慈ある儒士と称すべけれ。今此言を説くにつきて翁が放蕩を切（せま）らるゝ事痛感最甚し、翁（我成）本商賈の出身、不幸にして父に早く離れ、業を継ぐほどなく類火に係りて家産共に滅ぶ、母を負ひ妻を従へて郷土に漂流する事二十年、終に病魔に逐れ明を失ひて（失明）後に母姑等逝去す、時に齡六旬に近く、妻亦老て落髪し、一身を輕舟となして都下

秋成の狂蕩と列子との関係

（京都）に来れども、産業無く囊中尽て尼は頰に死す、亦此患に値（あい）て両明漸に盲となる、偶然名医に逢て左明開くといへども、尚翳雲常にかゝりて、読書の写字の業の志を遂ざるに到る。然ども命録尚尽ざるにや、傍人扶けて飢饉に到らしめず、嗟呼々々、一人責問、汝何ぞ産業を脩めざる、答、古人云、郷土を去り六親を離れ業を脩めざる是を狂蕩と云、又才能に誇り名を世に銜売して己を顧見ぬ人を智謀の士といふ。此二つの者は道にかなはぬいたずら者と云り、さらば不学不才を以て心を熬りなより翁は狂蕩と云れて思ん——

右の文中特に「郷土を去り六親を離れ業を脩めざるを是を狂蕩と云、又才能に誇り名を世に銜売して己を顧見ぬ人を智謀の士といふ。此二つの者は道にかなはぬいたずら者と云り」という一節は前掲の『自伝』、『檜の杣』の外、秋成六十九歳までになつた『藤篋冊子』にも、また秋成七十五歳に刊行された『文反古』にも述べられてい

るものである。このように「狂蕩」の一節は秋成の著書の随所で発見出来るのであつて、「狂蕩」という生き方は秋成の一生、否秋成の本質を貫ぬく生活態度があつたと見受けられる。

では「狂蕩」ということは如何なる生活態度であり、如何なる意味をもつものであろうか。この事を解明するにも、その原拠をさぐることは極めて意義のあることである。

二

ところで近世文学並びに近世の学問や思想は何らかの形で過去の

日本および中国の古典籍から学び、あるいは材を借ることを常としている。とくに「読本」という近世の文芸について故後藤丹治博士は次のような重要な説を述べられている。すなわち、

読本の研究の主要な一面として、それと前代または同時代の作品との比較考察といふことが取上げられて来るのである。蓋し模擬と脱化とは、この種の小説の常套手段であつて、それが如何やうに先行作品を受容したかといふ、その撰取振り、翻案振りを検することによつて、当該作家の手腕とか、素養とか、創作態度とかを窺することが可能であり、またさうすることによつて、作品そのものの特色とか、乃至作品と時代との関聯とかいふやうな広汎な問題をも併せて考へることが出来るのである。換言すれば、この比較研究によつて、始めて該作品の本然の姿に於て確認し得るのであり、この基礎作業を経過するのでなくしては、該作品に対する正しい評価は下し難いと思ふのである（兩月物語出典をさぐる、国文学、解釈と鑑賞、第二百六十五号）

ここでは、読本の文芸的性格との関聯において博士の国文学への見識の一端を述べられているが、しかしこのことは、ひとり読本という近世文学のみに限ることなく、なおひろく近世の思想や学問にまでおしひろげて共に「根強い伝統と基礎」（同文）とがある限り、同様のことが言えるのである。

ところで今ただちに中国の古典を比較する前に、予備的考察として秋成の思想学問の系譜をたどつてみよう。

秋成の広大な分野の中で特色づける思想学問は何よりも国学をお

いて外にない。

しかるに国学思想は儒道思想よりは道家の思想になじみが深いことは論を要しない。それは儒学を批判するものとして国学が誕生して来たからである。

事実、国学の創始者の一人賀茂直淵「明和六年（一七六九）歿七十三歳」は彼の著書『国意考』の巻頭において儒家ならぬ道家である孝子の説を引用して

孝子といふ人の天地のまに／＼いはれし事こそ、天か下の道にはかない待りけれ、そをみるにかしこ（中国）もただいにしへ（古）はなほ（直）かりけり、ここ（日本）もたたなほかる事は右にいふ歌のことし

と述べて、自然のままの生命を尊重し、直き心の生き方を説き、人間性を儒教の朱子学的「理」で処理できないものとして排し、それにかわつて、自然性にもとづく人間観を示して、極度に備教的道徳を払いのけ、自然尊重の孝子の説に共鳴したのである。

また上田秋成はここにいう真淵国学の門下、その四天王の一人加藤字万伎「安永六年五（一七七七）十七歿す」に師事して真淵の思想に接したのであるから、彼もまた道家の思想とは決して無縁であり得ない。

事実、秋成の著書を見ると『史論』には「老子云、学を絶てば憂いなし、其の旨おほらかに憩なひてあらむ」と老子の説に理解の態度を示し、また『檣の杣』では「無為自然」という老子のことばや、その他の道家『莊子』、『列子』の説を秋成の著書の中に発見するので道家の思想が秋成に影響していたことは否定できない。とりわけ

『列子』については『胆大小心録』に「楊朱云。百年は寿之太高なり云々」といつて『列子』の一文を載せているほどであつて、列子の思想にふかく傾倒していたことがわかる。

そこで秋成の先掲の『自伝』および『檀の杣』の一節を意識して『列子』をみると、左の如き文章に出合うのである。

有人去郷土、離六親、廢家業、遊於四方而不歸者何人哉、世必謂之、為狂蕩之人矣、

又有人鍾^{オホシ}賢世、矜巧能、脩名譽、誇張於世而不知己者、亦何人哉、世必以為知謀之士、

此二者胥失者也、

而世与一不与一、唯聖人知所与、

『列子』

この列子説は狂蕩の人も、智謀の士も二者共に失する人である。

といつて『檀の杣』等の秋成の文章と同じ趣旨のことをのべている。さらに『列子』と『檀の杣』の両者の文字詞句を比較検討してみると次の通りである。

「故郷を去り六親を離れ産業なきものは狂蕩の子と云」（檀の杣）と「去郷土、離六親、廢家業、為狂蕩之人」（列子）

「才能に誇り名を世に銜賈して己を顧見ぬ人を智謀の士といふ」（檀の仙）と「矜巧能、脩名譽、誇張於世、不知己——為智

謀之士」（列子）

「此二つの者は道にかなはぬいたずら者と云」（檀の杣）と「此二者胥失者也」（列子）（傍点筆者）

そとの比較のように両文の語彙は全く一致していることに注目さ

れる。このことから秋成は狂蕩の語句を『列子』から学んだことが明らかになるのである。

三

では一体「狂」「蕩」とは根源的には如何なる意味内容をもつているものであろう。

ひるがえつて『論語』をひもといてみると

子曰、古者民有三疾。今也或是之亡也。古之狂也蕩。古之矜也廉。今之矜也忿戾。古之愚也直。今之万也詐而已矣。（傍点筆者）

この「狂也蕩」とは古人の「狂」はほしいまゝで志願のはなはた高い者があつたが、今の「狂」は放縦である（宇野哲人著、論語新釈）というのである。

ところで「狂」や「蕩」について尚考えてみると「狂」とは常規をはずれた奇抜な振舞いや心が一事に専念して進むことを言うのであり、「蕩」とは我まゝな、自己に自由自在なことを言うのである。

では、当の秋成自身は一体如何なる所懐をもつて、自らを「狂蕩」と呼んだのであろうか。ひるがえつて秋成自体の「狂蕩」の考察について論を進めよう。

先に「知略にて家をおこすも道にあらずと、聖人は教へ給へりきとぞ、智略なき性に心をいらんよりは、狂蕩と呼ばれ、おのがまゝならんとて、かく老い朽つるまではありけり」と「自伝」に聖人の道でない智略によつて家をおこすよりは狂蕩と呼ばれて、おのがまゝに生きるのが本願だと秋成の生き方を自懐している。

ゆえに秋成のいう「狂蕩」とは「己がまゝ」という自己のままに自由自在に生きること、自己の心に偽りなく純粹であることを言っているのである。

更にいえばその中には俗悪にさからい、虚偽をきらひ、私智策略に反抗する強い反逆精神と批判精神とがあつたのである。

したがつて、狂蕩精神に生きるかぎり社会の通念や倫理を特に生活の尺度とするのではなくて、むしろ社会の習俗に逆らつて、自己の真実のままに一途に歩む態度があつた。その自覚は、世間を横行する蟹に自らをなぞらえて「無腸」と号したのである。

それは結局、自分に忠実に生きる人間らしい真実な生き方を本質としていたのであつて、秋成の自分をいつわることのできない純粹

かつ正直な性格のなさしめる結果であつた。

この精神によつて、自然逆境にあつても自己自身を失わなかつたし、またそれ故にこそ逆境に追いこまれることになつたのである。

ここにこそ秋成が不遇な生涯、幾変遷をたどる多彩な生涯を迎らねばならなかつた一原因があると共に、これがまた不屈な精神を培かい、一生不屈に貫ぬきとおした一素因であると思う。

けだし秋成の生涯は狂蕩精神によつて支えられ、また秋成の文学、思想、生活のすべては狂蕩精神の表現化具体化であつたとみても決して過言ではない。

昭和三十四年六月 稿

昭和三十八年七月十五日補